

《付論 3》

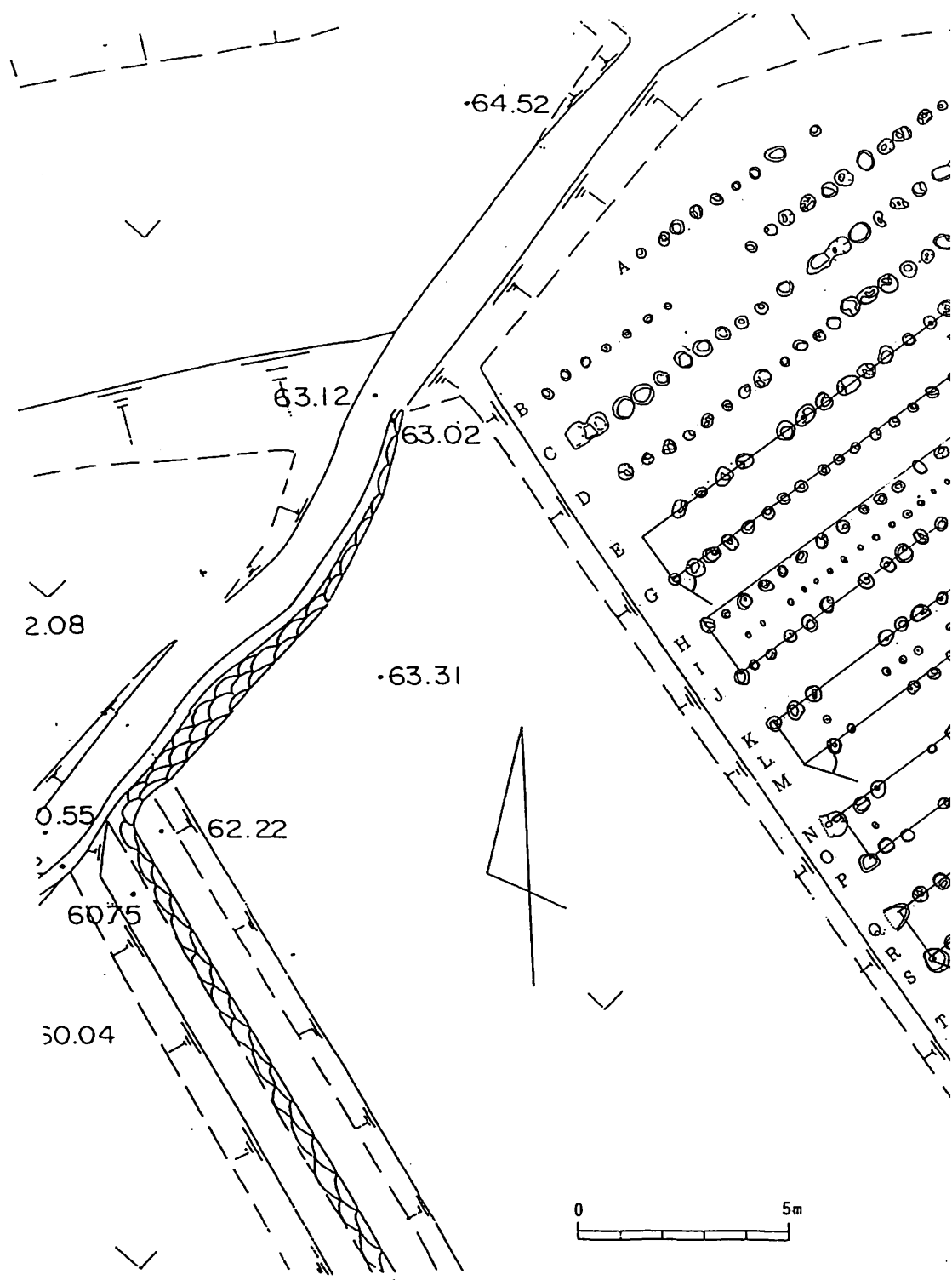
「平成4年度調査で検出された柱列について」

大三輪 龍 彦（鶴見大学文学部教授）

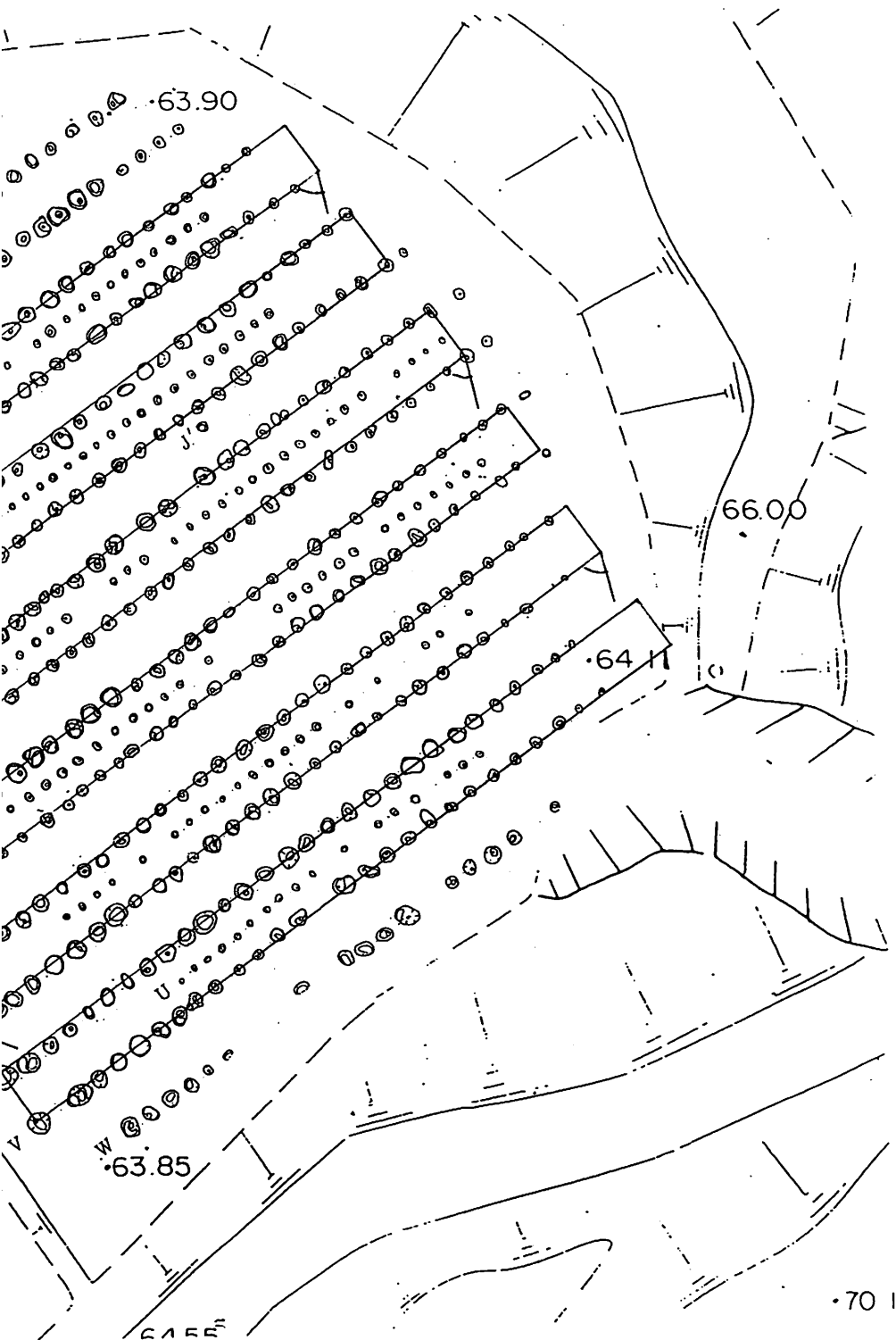
平成4年度の発掘調査は城跡南西の裾部に当る平場について実施され、23の柱列が確認されている。三加和町文化財調査報告第7集『田中城跡 VII』によれば「遺構としては整然と並ぶ柱列が23列確認されただけである。全てほぼ並行に並んでおり、N56° Eに主軸をとる。柱穴の大きさには大小二通りがあり、大きいものが17列、小さいものが6列で大きいものは長径16.0～127.0cm、短径10.0～58.5cm、深さ3.8～28.6cm、柱穴間隔約40～70cm、小さいもので長径12.0～26.0cm、短径9.5～22.5cm、深さ2.3～12.1cm、柱穴間隔約40～50cmとバラツキがある。さらに、大きな柱列の間隔は1.2～1.5mあり、この間に小さな柱列が並んでいる。いずれも、後世の耕作などで上部をかなりカットされており、底部のみが辛うじて残っていたという状況であるが、大きい柱穴の方には柱痕跡の底と思われるものが多数見られた。このことから何等かの構築物があったことは確実と思われる。」とされている。報告書の遺構配置図では、柱列を北から順にA～W列としている。そのうちA・B・C・D・E・G・H・J・K・M・N・P・Q・S・T・V・Wの17列が大きい柱列で、F・I・L・O・R・Uの6列が小さい柱列である。小さい柱列はFがE・Gの間に、IがHとJ、LがKとM、OがNとP、RがQとS、UがTとVの大きい柱列の間に位置している。また、柱穴の残存状況は北側程悪いようである。さて、この23列の柱列をどのように考えるかであるが、可能性としては柵列あるいは建造物が考えられよう。まず柵列としてこれらの柱列群を見ると柱穴は平場の全面にわたって掘られており、しかも城の防備のためのものとする、この平場が西に向って開口する谷の裾部に位置することからして、南北方向の柵を想定せざるを得ない。とすると、柵と柵の間隔は40～50cmということになり、平場内での兵員の移動は不可能となってしまう。調査地内出土の遺物も小片とはいいながら染付や青磁といった中国磁器等や土師器片が多数出土しており、他に火舎の断片も3片認められる。これらの遺物は何れも生活道具であり、この平場において生活が営まれたことを示している。また、他に大小の鉄砲玉8個が出土しており、何らかの攻撃目標となっていたことが予想される。山口県立文書館蔵の毛利文庫絵図の中に『迎春・和仁仕寄陣取図』がある。この図は天正十五年（1587）の肥後国衆一揆の際の田中城攻めに関する仕寄陣取図で、攻撃の陣取と城方の様子が描かれている。この図によれば、柱列の検出された平場は豊臣秀吉軍の総大将小早川秀包陣の正面にあたり、そこには柵に囲まれた中に18棟の建物が描かれていて、何らかの建造物の存在が推測される。報告書でも「大きい柱穴には柱痕跡と思われるものが多数見られ、何等かの建物遺構であったことは確実であろう。」と柱列が建物の遺構の可能性が強いことを示す。また、同報告書では「専門調査

委員の意見は、和仁軍の連棟式長屋（兵舎）跡ではないかということでは一致しているが、どの柱列をセットとして考えるかで異なっている。基本的に2列の大きな柱列で建物を構成することに異論はないが、これと小さな柱列をどうからめるかということが問題である。今のところ、間に挟み束柱とする大2・小1の3列を1セットとする考えと両外側の受けとする大2・小2の4列を1セットとする考えがある。しかし、大きな柱列の間隔が1.2～1.5mしかなく、兵士が寝泊りするには狭すぎないか、また、柱穴と柱穴の間隔も非常に狭く、数が多すぎるのではないかなどの疑問が残る。」として連棟式長屋の可能性が強いことを指摘し、柱列の組合せを大2・小1と大2・小2の二通りの組合せを挙げるが、大きな柱穴の南北間隔が1.2～1.5mしかないことから兵士の寝泊りする長屋としては狭すぎるのではないかと疑問を呈している。確かに大2・小1の組合せではいかにも狭く、大2・小2の組合せでも狭いことに変わりはない。この疑問を解消するためには発想の転換、つまり柱列の組合せを大2・小1と大2・小2の組合せに限定せず、異なった組合せを考えてみる必要があるのではないだろうか。柱穴の残存状況は全て良好な状態とはいえないが、比較的残りが良いと思われるE列からV列について考えてみたいと思う。例えば、E・F・G・H・I・J列を1セット、K・L・M・N・O・P、Q・R・S・T・U・V列をそれぞれ1セットとして考えてみたらいかがであろうか。つまり、大4・小2の組合せである。仮にE～J列を例にとれば、E列とJ列が側柱、G列とH列を框柱、F列とI列を床束柱と考えられはしないか。つまり、E列・J列を側柱として外壁板を張り廻らす。E列とG列、H列とJ列の東と西の柱は壁板でつなぐ。G列とH列を束柱として框材を支え、E列とG列、H列とJ列の間には床板を張り、FとIの小柱穴列は床板を支える床束である。G列とH列の間は土間の通路と考える。こうして考えると、E～J列をセットとする建物は3.6m以上（12尺以上）×13.5m以上（45尺以上）で建物面積は48.6㎡以上（15坪以上）となり、決して狭い面積とはいえない。また、寝泊りに必要な床板を張った部分も32.2㎡以上（10坪以上）を確保することが可能である。

北海道江別市の野幌森林公園内に北海道開拓の村という野外博物館がある。この博物館では、広大な園地内に道内に遺されていた近代建築を移築して野外展示している。その一角の森の中に、かつて、北海道開拓の際に森林伐採の作業に従事した人々が寝泊りした作業小屋が移築されている。この小屋は切妻造の長屋状の建物で、片側の妻に片開きの戸が取り付けられ、内部は中央に土間状の通路部分があり、その両側に寝泊り部分の低い床が設けられている。屋根の高さはあまり高くない。田中城跡で確認された柱穴列をE～J列、K～P列、Q～V列をそれぞれ1棟の建物とすると、北海道開拓の村に移築されている森林伐採の作業小屋に近い構造のものになると思われる。その場合でも、田中城跡建物は東西45尺以上と長い建物になるので、框束と考えているG・H・M・N・S・T列の何本



平成4年度 検出



構配置図

かは通し柱になる可能性は否定できない。それと同時に、側柱としているE・J・K・P・Q・Vの柱列の何本かは框束となる可能性がある。もし、E～J列、K～P列、Q～V列をそれぞれ1棟の建物とすると、この平場には少なくとも3棟の長屋の存在が考えられる。更に北側部分での遺構の残存状況があまり良くないことから考えると、A列とB列、C列とD列の間に小柱穴列が存在していた可能性も捨て去ることはできない。とすれば、A～D列で1棟を考えることもできる。また、V列の南側にW列があり、もう1棟長屋が増えるかもしれない。以上から、この平場には最低で3棟、多ければ4～5棟の長屋が建っていたことになる。

平成元年12月に山口県立文書館で発見された『迎春・和仁仕寄陣取図』は、天正十五年(1587)の肥後国衆一揆の際に田中城攻めに際しての寄手側で作成した図といわれる。この陣取図によれば、本丸西側裾の柵に囲まれた平場には18棟の建物が描かれている。建物の棟数は正確であるかどうかはわからないが、本丸の西裾の平場に建物が何棟か建っていたことは事実であろう。そして、位置からいって、この東西に長い建物群が陣取図に描かれた建物である可能性は極めて高い。ただ、『田中城跡 VII』でいうように、この建物を連棟式兵舎と推定して良いかどうかについては問題がある。特に兵舎と位置付けても良いのだろうか。本丸西側山裾の平場に建物群があったことは、陣取図と発掘された遺構によって確認されたといって良いが、陣取図も柱穴群もその建物群が兵舎であるという証拠を示してはいない。どちらかといえば陣取図から見る限りでは、迎春・和仁軍は本丸や二ノ丸といった田中城の高所に兵を集めていたと考えられ、この山裾の平場の建物群を兵舎と断定できるかは疑問である。秀吉軍の城攻めによって城内に避難した周辺住民の仮説住宅であったかもしれない。